

## ▼学会活動

# 東アジアドイツ史会議

——二〇〇八年の日本開催に向けて——

竹中 亨

外国史研究では、国際的な交流となると、研究対象となる国との関係が濃密になりがちである。ドイツ史の場合で言えば、ドイツの大学に留学し、あるいはドイツの図書館や文書館に文献・史料の収集に赴く。ドイツ人の歴史家を訪ね、あるいはドイツから研究者を日本に招聘する。これらはもちろん、学問の性格上、避けられないことではあろう。

しかし、ドイツ以外の国とも、もつと交流があつてもよいのではないか。ドイツ史研究はドイツ以外のさまざまな国で進められている。しかも、当然ながらその国に独自の問題関心や研究状況を下敷きに行われている。だとすれば、それらを突き合わせることで、新しい展望が生まれるのではないか。あるいは、他国のドイツ史研究者と語り合うことで、自分がこれまで自明視してきた立脚点を相対化することもできるのではないか。ドイツ史研究の閉塞が取り沙汰される昨今では、それははいよいよ必要なはずである。

東アジアドイツ史会議は、そんな発想で生まれたものである。韓国、中国、日本の三ヶ国のドイツ近現代史研究者が一堂に会して、研究を発表し、討論する。東アジアという共通の地理的・歴史的環境のゆえに、よく似た発想もあれば、研究の伝統のありようや長さの違いから、発想がずいぶん異なる面もある。さらに、テーマによっては、ドイツの過去

と日本の過去が二重写しになって、それが新たな議論をよぶこともある。

発端は、二〇〇六年三月のことであつた。筆者は勤務先の所用で、ソウル大学を訪問する機会があつた。上述のようなことを考えていた筆者としては、この機会に韓国側と接触できればとの思いがあつた。そこで、すでに韓国のイギリス史研究者とコンタクトをもっていた同僚の秋田茂氏にお願いして、先方のイギリス史研究者にその斡旋を依頼したのである。その結果、韓国のドイツ史研究会 Korean Society for German History を代表として、ノ・ミヨンホン（韓国外国語大学）、ハン・ウンスク（延世大学）両教授と連絡がとれ、お会いしたのであつた。

両氏からは、韓国のドイツ史研究事情をいろいろとお伺いすることができた。韓国では、西洋史学会の下に、国や地域別に八つの研究会が組織され、ドイツ史研究会もその一つである。韓国全体の研究者をカバーして、その会員数は一〇〇人以上にのぼり、恒常的に研究会を開催していると同つた。組織的な基盤、活動の活発さは、聞いていて羨ましいかぎりであつた。

実は、ソウルに行く際に、筆者には決して具体的な計画があつたわけではなかつた。せいぜいのところ、これが手始めになって、一、二年のうちにも共同の研究プロジェクトを立ち上げられれば、とか、大学間スタッフ交換のパイプに乗せて人的交流ができれば、という程度の考えしかなかつたのである。そういう方向での提案をとにかく韓国側してみようというのが、筆者の腹づもりであつた。

ところが、両教授はお会いしたその席で、東アジア三ヶ国のドイツ史研究者を集めた会議をしないかと逆に提案されたのである。驚いた筆者が詳しく伺うと、実は韓国側でも、しばらく前からこうした国際交流の

案が浮上していて、そのために中国や日本への打診を行おうとしていた矢先だった。そこに筆者が韓日の交流を切り出したものだから、まさに渡りに船となったわけである。意外な展開に筆者は少々戸惑ったが、交流が早く実現するのにむろん否やはない。こうして、韓国側の計画に沿って日本でも準備をすることを函教授に約束した次第であった。

私は、韓国から戻ってまもなく、ドイツ現代史研究会例会の場をお借りしてこの件を報告し、日本側としてどういう態勢で取り組むかをお諮りした。研究会では一応、木戸衛一、野田昌吾、丸島宏太の各氏と筆者で、日本側の準備委員会を組織することになったが、これまでの経緯から、筆者が中心になって対応することに決まった。その後、計画は韓国側で急速に具体化した。かくして、第一回会議は二〇〇六年一月二日にテグ大学で開催されることに決まった。統一テーマは「各国におけるドイツ史研究の受容」である。報告者は、中国から二人、日本から三人である。日本側の人選は、上記の準備委員会にご相談したが、種々の経緯で、木戸氏、北村昌史氏、それに筆者ということになった。中国とは、韓国側が独自に連絡を取られ、社会科学学院から報告者が出ることになった。

なおこの会議では、韓国側との申し合わせにより、報告者の経費のうち、宿泊費は主催者側の韓国がもつが、旅費は参加者側の負担と決まっていた。これに関して、ドイツ現代史研究会事務局からは、旅費について研究会として補助を出すことを検討してもよいとのありがたいお申し出をいただいたが、結局は各人で工面することになった。

会議は一月一日〜二日の二日間であった。韓国側が手配してくれたホテルはすいぶん豪華であった。大学のゲストハウスにでも泊まるものと思いきんでいた私はいささか面喰らった。テグ大学は市の郊外にある

が、当日そこに向かう途中、キャンパスに通じる高速道路に「歓迎！東アジアドイツ史会議！」という横断幕がかかっているのを見たとき、私はえらいことになったと怖くなった。どうも、予想していたよりはるかに豪華で、大がかりな会議になっているらしい。

案に違わず、会議はすいぶん大規模であった。会場の大きな講堂は、参会者でかなり埋まっていた。韓国のドイツ史研究者が総結集しているようであった。ドイツ史だけではなく、来賓としては韓国西洋史学会の会長も招かれていた。

会議初日は、午後から始まって報告が四本行われ、翌日は朝から五本の報告の後、パネルディスカッションが行われた。報告は三ヶ国がだいたい順々に回るように組まれ、各報告の後、韓国側からコメントータが論評した。報告も質疑応答も、すべてドイツ語で行われた。紙面の都合で個々の報告の内容は省くが、議論は白熱した。筆者の場合、コメントータを務めてくださったのは、ビーレフェルトで長く研鑽を積んでこられた若い女性研究者であったが、舌鋒鋭く迫って来られて、対応に冷汗三斗であった。

二日目には、会議の休憩時間と夕食後の席で、次回以降を会議をどう開催するかが、韓国側代表と中日の出席者の間で話し合われた。席上、合意を見たのは、①三ヶ国回りもちで、隔年程度の間隔で会議を開く、②次回は、二〇〇八年秋ころに日本で開催する、である。ただ、会議の言語については議論になった。というのも、筆者がドイツ語ではなく英語、あるいは少なくとも双方の併用を主張したからである。日本のドイツ史研究の現状を見るにつけ、ドイツ史という枠を取り払わないかぎり、新たな展望は生まれえないというのが、筆者の持論である。ただ、筆者の主張はどうしても韓中側の賛同を得ることができず、結局、次回も

ドイツ語を会議言語とすることになった。そして、日本の窓口は当面、筆者が務めることになった。

こうして会議は全日程を終了し、参会者は二年後の日本での再会を約して解散した。帰国した後、筆者はドイツ現代史研究会の例会で、簡単な報告をさせていただいた。

さて、問題は今後である。二〇〇八年秋の開催は国際公約である。一応、ドイツ現代史研究会を母体に、開催準備委員会が結成された。ただ、今日の大学をめぐる環境のなか、委員諸氏も多忙で、いつの間にか筆者のほうで進めさせていただくことになった。一番の苦労は金策である。韓国の場合ほどの豪華さは望むべくもないが、あまり貧弱では響盛を買う。ところが今日のご時世、しかも逆風の西洋学関係となると、助成を得るのは容易でない。財団など次から次へと総当たりしたが、なかなか色よい返事がもらえず、一時は私費で賄うことも覚悟したくらいである。実は、今もまだ完全に見込みが立っていない。

大会の日程はすでに決定していて、一月二二日(金)～二三日(土)である。場所のほうは、大阪の線で進めている。報告者は、三ヶ国それぞれ三人ずつを予定しており、すでにほぼ固まっている。

テーマは、「東アジアにおけるジャーマン・ソフトパワーの歴史と現在——日韓中はなぜ『ドイツ好き』か——」と決まった。東アジアの三ヶ国は、歴史的に見て、ドイツ的文化への偏愛が際だっているようである。そもそも「東アジアドイツ史会議」なるものが成立すること自体、それを物語っている。歴史だけでなく、音楽や文学、教育制度など、「ドイツ好き」は多方面に渡っている。むろん、日本の植民地支配という過去が大きいにせよ、しかしどうもそれだけではなさそうである。これを、各国におけるドイツの文化的影響の起源と展開を軸に、現代の

文化状況まで視野に入れて論じようというのが、このテーマの狙いである。

筆者の期待としては、単に歴史だけではなく、文学、哲学、社会学などの関係領域、さらには日本史や日本文化論でも議論に参加してもらえるのでは、というところがある。今後、その期待が実現するよう、準備にあたってはさらに努力したいと考えている。ドイツ史研究者の方ももちろん、ご関心の方に多くご参集いただきたく、お願い申しあげる次第である。

ドイツ史だからといって、ドイツにのみ眼を向けることはない。東アジアの研究者仲間と交流することで、新たな刺激が期待できよう。そうすれば、わが国のドイツ史研究もきつと活性化するに相違ない。実は筆者は、この会議以外にも、東アジアとの連携を強めたいと考えている。目下、筆者の勤務先では、進藤修一氏のお骨折りでソウル大学から数ヶ月、ドイツ史研究者を迎える話が進行中である。もしこれが実現すれば、研究教育の両面で関係が深まるものと楽しみにしている。

以上、動き出した東アジアドイツ史会議についてご紹介した。実は筆者は、会議の経緯についてその都度書きとどめることはしなかったの、細部で勘違いがあるかもしれない。お詫びするとともに、関係者の方でお気づきの点があれば、ご指摘をお願いしたい。

(たけなか とおる・大阪大学教授)

